



華山画談

卷

子 4

1167





華山畫談

渡邊華山は尋常一様の畫家に彫る事には人の意知する事
ころより深く歴史之趣に通じ萬て世界の大概を明かにし
要ふの畫一都一の概略描きあつて餘り肉食者の爲に
畫賣する事と進世の偉人あり丹青の筆の如きは盡し
餘餘の如くも無意味なりと評する者も多し然れども
其の畫は其の人の人ありあつて大志あり高性あり
其の爲に學びて其の意に附随する者にして其の意に
附随する者も多し然れども其の意に附随する者も多し





華山畫談

渡邊華山が尋常一様の画家に飛躍するは人の悉知するところあり深く歴史文藝に通し兼て世界の大事勢を明かにし憂玉の血誠一節の情概論とありて終に肉食者の爲に陷穽せらるる言ひ近世の偉人あり丹青の筆の如きは蓋し餘技のみ知とも雅懷筆より習業の暢達く元明に通ず別に二軸を遺す花卉翎毛人物山水皆具きたり如く入る華山は三好田原の人ありありして大志あり後儒舊見を變に就て學ひ頗る書史に涉獵す而して画才は實に天授に出づ而て儒たる人と欲せしに友あり告げて曰はく君



家貧に親老たり天才を售りて孝養を治すに若かずと先
きはち意を決して血家宗家山金金陵の門に遊ひ母に
償ひして錢十六文を乞ふ以て資と爲す先生舊教席にあり
於て私に愛して水を飴す嘗て贅を谷文晁の門に拜しに
文晁延き見て先づ坐右の末座に強き出づて画かゝる先生吐
息に揮灑して群言評語を乞ふ墨痕淋漓として毫末あり
あり文晁驚き起て敬して曰く君は吾が門下たるべき人にあり
ずと華山強て後ひ遂に其弟子と爲る其後画道大に進み若輩
大いに擡りしが高野長英等の蘭学者と交り海防の事を論し幕
府の忌諱に觸れ獄に入りて後三刑田原に送られ後ち

終に自殺す時に天保十二年十月十日也華山の門に遊て家を
爲すもの椿山福田平香等其門下たり華山嘗て椿山平香の
二人に語て曰く市井の徒なる吾人の画を学ばざらん余自終に
する所を以てすれば雲烟は即ち吾を名を乞ふと云ふ花弁は即
南田樗を乞ふと云ふ雲烟は椿山平香の長すゝ花弁は南田樗の
名を長すゝ亦其の得意とする所にして其技を求むと椿山
性謙厚れめ華山と共に文晁門下の弟子たりしが椿山華山の人と
ありて欣慕し文晁死す後遂に師承の礼を執りて華
山の獄を出て田原に赴きや椿山口として之れを慰問し郭
尚書卿み言問絶えず其の隙隙に閑人に臨筆を以てせ

しが華山幽居中より答書を致して懇懇之れを教へたり

すうところは此問答の書にして所子等並に華山三代の衣鉢を傳へし後邊華石氏が蒐録せしものなり 全篇皆な零金碎玉にして勿く又案牘の如き自ら大家胸中の年華ある氣象を有るに足なり 是れ華石の孫編久々華石氏の遺稿を切に讀み得て 華石氏は少華翁の子弟にして先父翁の道統を継ぎたる人なり 其筆能く先師の遺風を傳へて山水花鳥に巧みなり

第一 柳湾小像

天保末の頃江戸小石川にありし橋の山が館柳湾に千載の古像

を傳へし華山翁の別心を伝へしに華山其真の如きし又左の一書を送れ

人物袖衣收り得共直に伝送る 故に宛何れ様考致し得これにても江戸東に傳へる人は多し其元明已上の人々に見れば其面大抵七十一歳程のはず大ボク一は其不似二面は其像なり 予は其の斗致上申上 十一月四日

(點線は華山の加筆なり)



此画の上に華山の評あり曰く

帽一筆不映失妙 持策雨袖下垂大失神

杖手頗有所得故移為右手 衣摺之法以簡淡為勝

一筆不可增損運腕中勿預期其效孟子所謂心勿忘勿助長是也

第二 桃花曉鶯

前と同じ頃椿山は我が弟子蒲川が描ける。題画を華山の許に郵送して品評を乞ひしに華山の返書あり其回答トの如し

椿山「桃花曉鶯」此様なる題とて蒲川認る画を其越

依其圖は様ふも圖に依ひき



華山答画の出来は免も角も老兄の意を其画様を教作
為めに汲み取りし事あれども何れも其意を以て其上
鳥の形と桃枝の屈曲とに勿く意をいれ肝要なる曉字
皆無也曉と云ふは先靜なる形柳は露を含み蒼鶯

既に曉烟猶散雪は曉起さうしくこ有情な情動靜
の時也是は意義也極は屈曲不致す此作ふれは直枝文
加の極極さうさうし學も一羽の才曉よりし隱え最面白
かうし

椿山問 風貌風起画の才一義と云ふを問待ぬは自然是を
先入段も名ぬ何あふものか言人あれば言人だけの識もさうし得
共我等こころは勘弁さうし

華山答 風貌風起人不到形貌物の言ひさう立儼と云ふ也
聖人の風何れも曾ふ不肖又言を以て人を驚吾これを宰裁
に失す客を以て人を取吾これを子羽に失すとあり況やこれを

以學画の才一義と云ふ不謂偽君子也子羽の堂々たる典に立て
何をあしめたしとあれば不足論は去脱并せられは味は不無り
趣味は古人の詩とて中心附と云ふ者益不少し

椿山問 秋風より風貌氣韵等と云ふも亦唯寫生にて生れ
の性情を傳ふ古画と云ふ思ひし其描くに於て南田翁の信筆
草墨運用と云ふ極致し心にあふんと云ふも亦得や我意と
云ふも亦人亦評然る者生に云ふとか或は俗套に云ふとかを情
に於て初見起るは其利を云ふは金師教を極致する自然其情に
もあつ自然さうさうと感歎に不極は去近來より其角を生し
胸腹收隠は其採花泥會の如画に其年下戒情歎擡を云ふ

華山答 凡物氣韻之同、心傳は在、同一般の形あり、凡物凡起
 筆は格調を指すや、に在、古画品評の凡物世嘉の凡物は
 筆墨運筆の同のみを申、古人も解し得、たものあり、画の生動
 と、いふはたゞ、様ありは、筆墨の凡物あり、凡物の筆、如く
 と、追て、所在、右、左、凡物力を、と、いふ、一、要也と、有、し、此、故
 筆力の偏も、偏あり、不能、とも、は、紙、按、より、一、力、を、と、いふ、如く、と
 中、に、とも、凡物凡起の事には、と、いふ、明に、在、た、し、郭、熙、の、説
 と、言、ふ、凡物凡起の凡物は、筆墨の筆墨、筆墨の凡物と、いふ、が、右、南、の、説、と
 在、僕、此、東、の、説、は、凡物には、凡物には、陰陽二端あり、其、筆、の、陽

剛之美を得、ものは、躍、魚、の、活、潑、新、筆、の、後、骨、或は、厚、雲、の、如
 く、或は、石、の、萬、象、を、翻、せ、む、が、如し、是は、厚、陰、を、と、いふ、卷、冊、に、不
 宜、即、林、石、記、の、説、に、在、凡物凡起の美を得、ものは、厚、雲、の、光
 輝、清、泉、の、平、流、或、雲、行、の、如く、或は、清、泉、の、如し、卷、冊、に、不、宜、厚、陰
 と、いふ、即、南、田、衡、山、の、説、に、在、凡物凡起の剛之美を得、ものは、剛
 と、いふ、不足、陰、の、如く、纖、弱、に、隔、り、いふ、の、陰、と、いふ、不足、剛、あり、ものは
 陰、を、と、いふ、板、陽、の、如く、又、陰、の、美、を得、た、し、
 歐、公、は、已に、異、あり、もの、と、取、て、清、い、骨、公、は、短、あり、もの、と、取、て、不、肥、是、右、公
 の、按、柳、如、然、に、在、陰、陽、偏、廢、あり、是、造化、聖、人、又、別、に、論、を、と、いふ、是、氣
 は、則、然、氣、の、事、に、て、風、起、格、調、の、事、に、あり、す

風起凡物之事

を今世人稱しはバツ改たる心得にて其得る事も殊其言も殊
なる故に雲をつかむが如くに此府の人其風趣官多きは風趣に度
以風趣も其風の害と申事には瘡々学画者これを第一義と心得ても
の先時史之出所あり僕常に風趣を以て人に教へず不謂僕若しと
鑄造改あり微塵の情ある事蓋て此府の法は風調
古を一つの教にあらざるをバツ心得はなごし風調は風松松調
の事にて古は意旨法古なるを云不謂知近の曲を忌むにたなり画と
ても共通にて写生知通なれば俗套に陥りて是は第一通へし其破か
他画事形似見と児童疎大のところに度々去風松調を名に心得
は山水宮疎の字に落松を以て雅とふし思ふに公が教と心得は極
く

其成其同臨概にして筆に及たぐい弗了解あるべし

足下写生にて其理其性情を修り数古人描排工夫に引合せを擇藩に
臨は南田翁の松翠に其順路を尋ねて其意に似たりとて其あれは能者
の事にて其極の情には至らず今足下四中に隣り今五中に其間両志の
境にありし其境に入んとせし時又可憐然し助けをすなわん今得
る事を推して道に進み自然の化を得んし

足下の画を見て世人は皆其の法を以て要部を風動ありとて其
由したるありし写生知通あるは数古人の助成なりきは南田の松
翠あれ必庸凡には落さるや

足下近々に其用を生んと恐るべし是は氣體統して疑をせず

よう儀と云ふか、剛極て陰生陰を陽成る、陰陽百道一海に
帰する如く、其玉極て即ては澤然一體にあり、其澤亦を海
すれば、水と陰と、陽とす、にて偏廢を陰陽のみと申に
あらず、大和孫合の天地生知安行の事、人とは因別あるものと推察
り、や、よ、にて、唐の事、は、古人も、許し、り、者、り、の、り、も、
今日より何とも申がた、は、王者の政、魏も、魏六經は、あし、
以、書、画の、力、十、年、五、百、年、は、して、書、き、り、者、風、の、飲、道、陰、の、求、め、り、如、く、
形跡を、之、唯、古人の、説に、任、せ、て、り、術、張、墨、並、為、画、聖、抱、朴、子、謝、安、
謂、顧、愷、之、曰、自、生、人、来、未、有、也、世説、古、今、獨、絶、張、懷、瓘、画、至、吳、道、元、天、下、
能、事、畢、矣、東、坡、張、僧、繇、顧、虎、頭、衛、協、探、微、四、聖、王、弼、訓、大、抵、右、之、通、ナ

水も王弼訓又言此雖習耳成好習好成風採其所余未可尽非第
未有孔聖之集大成金聲玉振者也私存亦此意に在座

近時曹倦園吳梅村の二賢王右谷を画聖と稱す此二賢の
み其他聞えあし

問 風起と人品に御論と成り了解倍其所に人無風起官多
責何人の句に成

答 袁子才の句に成るは、袁居の、近人の、詩、以、其、事、信、也、得、亦、其、界、
を、求、る、要、何、と、か、ふ、人、來、有、終、書、家、必、有、と、段、々、は、句、意、風、起、を、風、
起、の、意、き、人、多、く、は、貴、官、と、や、事、事、に、て、風、起、は、見、場、形、を、申、
い、因、て、風、起、風、初、の、み、と、心、と、して、画、を、學、ん、て、は、王、渭、郷、應、侯、君、

子と學に於て氣韵生動の氣韵とは違ひ申ふは氣韵は後に
申ふ

風趣は申通唯形貌に在りが時史の病なきにシテ申ふされども其
の趣と申は所謂去俗の意を先生の法眼に照れば後する可れ是生
法言に照れば言ふ可れと心得あれば風趣を立申能

俳畫の說

俳諧繪は唯趣を第一義といふ元祿の頃一様許ふ
と風韵は深きものとまじりて此風流の趣は古き新
はとく流本坊光悦とぞ照りあふべし俳諧は立國見
事には近頃其村一流を照りあふしるゝ學人のわれこれと

思ひ合描ぐべしすべしをもしろくわゝ氣あしくなすたけあ
しく描ぐべしこれ



光悦ハ寫生とて
強るゝれ



本阿弥全ク松花

世より来ル

を人にたゞらぬに世事かしくぬけぬえ立振舞物のい
いさまよきはあしく世のうとく酒辨にまけたるが凡
流に見えはは拙拙を申吞込あつて

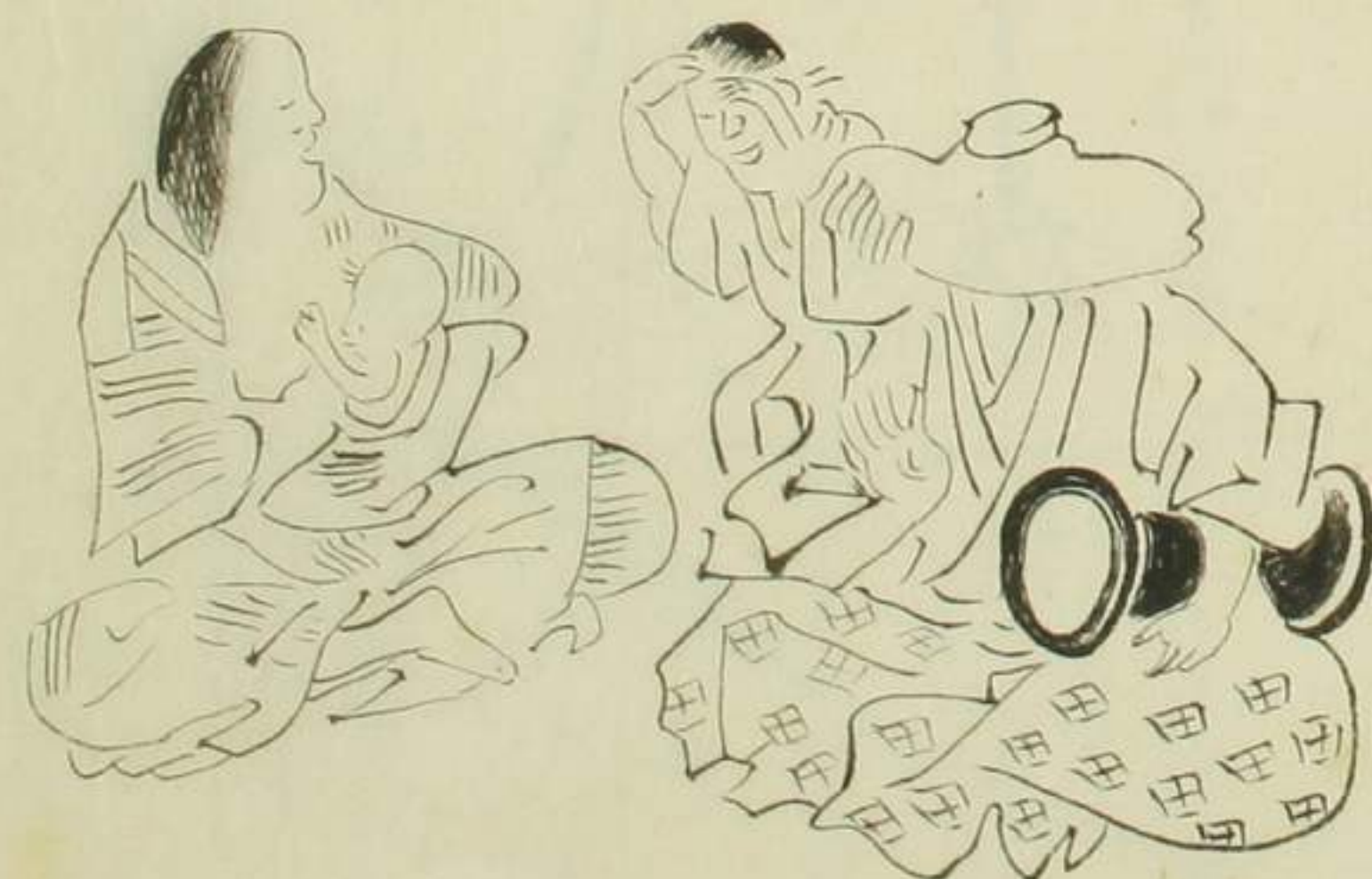
椿山同 黄徐二派の論は如何

華山答 吾祖筆記黄徐二派の論は今や宋沈存中筆法に據る
此筆法の説は宋人あれば信すべし必ず黄徐の極子其道ある
べし王武を興派壽平安帝を黄派と極め申なるが王漁

洋の見識あれども我輩は知れた筆と存しは五代の流まで
は画法未だ定まらず是れ楷行草の書法の如く分れども
を得ずは是を以て言ふ時二王一様のみあらず明人ととも
得べくも今にして其派を論するに思ふが如く王様氏必ず其
派を固きは得ざるべし王武必ず其派を固きは得ざるべしこれ
ども漁洋が論ありて画者變味とてたる心得はつとて其派の
間亦た益の論には之れあり其説に泥むべざるのみ筆法の
論を見れば黄徐の妙は極色にありた用筆極細にして
筆の二筋を見てもがめし其六具をかくるも水繪の具をそよ
の條花の臨陽をふち添むるを以て其物と看了かめし徐熙

ころも 梅も暖味と見え強けりて黄あゝ衣を画二半にあつて
 湯を煮す。おに水を煮す。ぬく熱を煮立不中し。老尼師心得あ
 るべし

華山翁嘗て風俗畫を撰す。上は正應元年の頃より近古にあつて
 當時の風俗を寫し。て微す。つし其國語を考證あり。描くに
 洒落の筆を以てす。浮れた桂林の逸品あり。いにあつては正應元年
 の風俗にして幼児の乳を哺す。仲老仲のあやす。お孫あを寫す
 瓢として天外の物の如し



静かなる日は
邵平を学ぶ
庾公の蓀を鋤
き申す



